

執務用

保存用

国土調査課

北上山系開発地域

---

# 土地分類基本調査

---

## 遠野

5万分の1

国土調査

岩手県

1970

## 序

世界に類例のない高密度経済社会が、わが国に形成されようとしているが、それが、国土の限られた一部のみ形成することを回避するため、高速大量交通通信ネットワークを全国に張りめぐらし、低開発地域を含めた全国的な国土利用の再編成が必要であると、新全国総合開発計画が指摘している。

とくに農林業部門においては、需要が拡大し、変化していく中で、これに対処した食糧や林産物の大量安定的な供給が必要であり、このためには、高位生産性を有する大規模な生産基地が求められており、本県総面積153万ヘクタールの3分の2におよぶ106万ヘクタールの面積を有する北上山系地域は、この要望に応えうる潜在的可能性を秘めた数少ない地域の一つである。

北上山系地域は、道路等の産業基盤の不備から、経済活動も不活発で土地利用の状況も低位であるが、全国的な土地利用の再編成という見地からみると、その恵まれた広大な土地資源を有効に活用し、観光的機能も含めた畜産物、林産物の一大供給基地として開発を促進しなければならない。

このため、農林省においては、広域農業総合開発基本調査地域として、また林野庁において大規模林業圏開発基本計画調査地域としてとりあげ、畜産を中心とした農業開発と、森林資源開発を柱として開発基本調査を進めている。

したがって本地域の開発は土地資源の高度な活用が前提となっており、このためには土地の基本的な性格を規定している、地形、表層地質、土じょうの三つの基礎的要素をとりあげ、調査し、その結果を相互に有機的に組合せ、その実態を正確に把握し、土地資源の利用の可能性をみつけだすことが必要である。

以上の観点より「遠野」図葉の地形、表層地質、土じょう、およびその他の土地条件について調査を行なったものであり、「遠野」図葉にかかわる土地資源の開発、保全並びにその利用の合理化、高度化のため広く利用されることを望むものである。

この調査は、開発地域土地分類基本調査事業として経済企画庁の助成を得て、岩手県北上山系開発地域土地分類基本調査作業規程に基づき、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を基図として行なったものであり、各調査にあたっては、「地形調査」と「表層地質調査」および「傾斜区分調査」、「水系、谷密度調査」、「起伏量調査」、「標高区分調査」

は株式会社地域開発コンサルタンツ，また「土じょう調査」は耕地については岩手県農業試験場，林地は岩手県林業試験場において実施するとともに，関係農林事務所，並びに農業改良普及所のご協力により作成したもので，関係各位の労に対し深く謝する次第である。

昭和46年3月

岩手県農地林務部長 鯉坂 富夫

(別掲) 調査担当者一覧

調整	経済企画庁総合開発局
総括企画調整編集	岩手県農地林務部北上山系開発調査室
	主幹 安藤 今雄
	主査 工藤 国雄
	主事 斎藤 静夫
地形分類調査	株式会社地域開発コンサルタンツ
表層地質調査	株式会社地域開発コンサルタンツ
土壌調査	岩手県農業試験場 専門研究員 中野 信夫
	岩手県農地林務部林政課 林業専門技術員 山口 博司
関係協力機関	岩手県遠野農林事務所
	岩手県大船渡農林事務所
	岩手県遠野農業改良普及所
	岩手県大船渡農業改良普及所

# 目 次

## 序

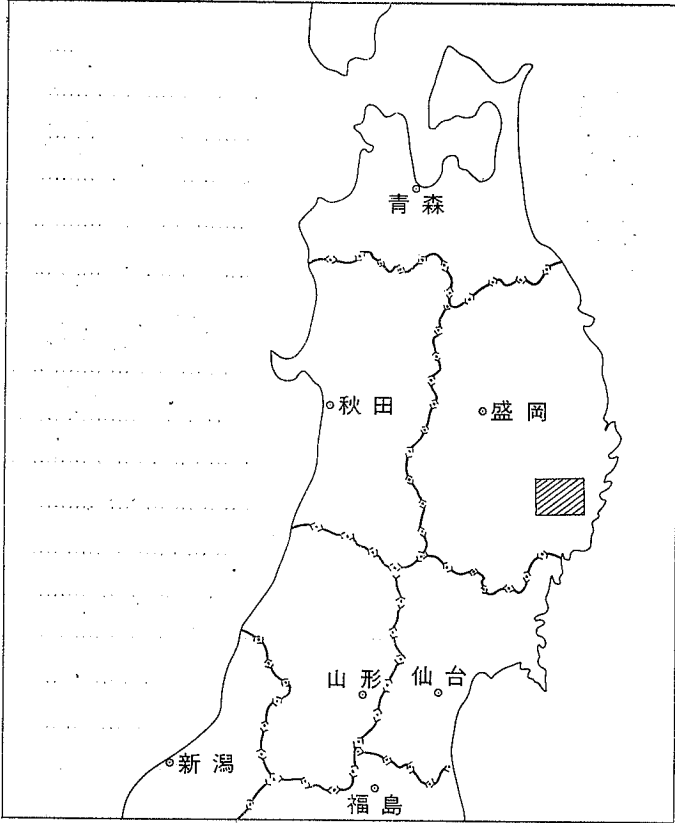
### 総 論

I 位置および行政区画	1
II 地域の特性	2
1 自然的条件	2
2 社会経済的条件	5
3 土地利用の概況	6
III 主要産業の概要	8
IV 開発の現状と方向	10

### 各 論

I 地形分類	13
1 地域概況	13
2 地形各論	13
II 表層地質	16
1 表層地質概況	16
2 表層地質各論	17
3 応用地質	19
III 土 壌	20
1 山地および丘陵地の土壌	20
2 台地および低地の土壌	22
IV 傾斜区分	23
V 水系谷密度	24
VI 起 伏 量	25
VII 標 高 区 分	27

# 位置図



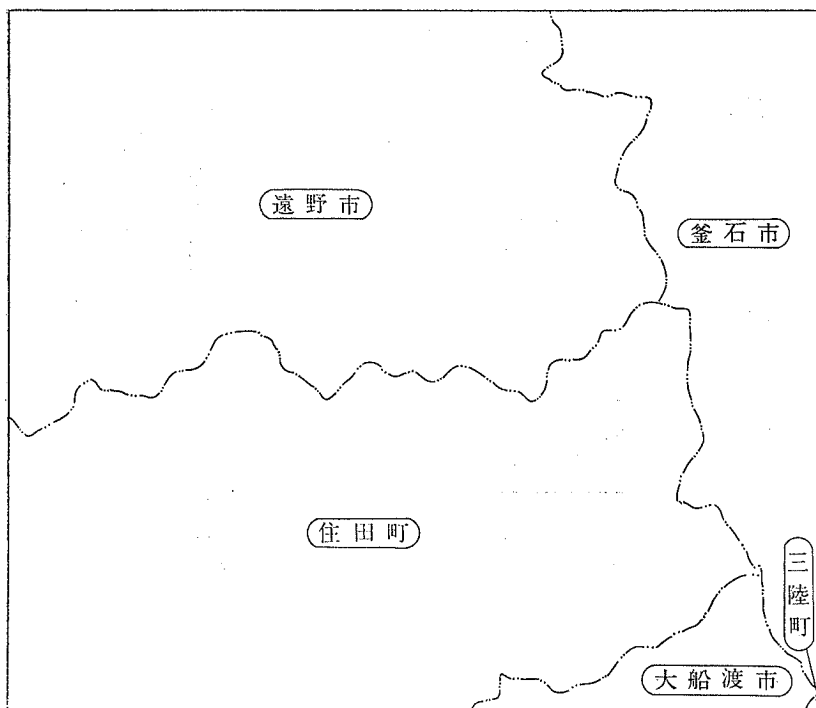
# 総論

## I 位置および行政区画

「遠野」図葉の地域は岩手県の東南部に位置し、20万分の1地勢図「一関」図葉に含まれる。図葉辺縁の経緯度は東経141°30'10"～141°45'10"、北緯39°10'～39°20'であつて、図葉の実面積は399.22km<sup>2</sup>である。

「遠野」図葉は遠野市、釜石市、大船渡市、気仙郡住田町、同三陸町の3市2町の行政区画からなり、遠野市の市街地が含まれる。図葉内の市町村別面積は第1表のとおりで、その市町村別構成は、住田町39.6%（同町全面積の47%）、遠野市38.7%（同23%）、釜石市18.1%（同16%）、大船渡市3.6%（同8%）等となっている。（三陸町は図葉内に含ま

第1図 行政区画



第1表 図葉内の市町村別面積

区分 市町村名		図葉内面積		市町村全面積 B (km <sup>2</sup> )	A/B×100 (%)
		実数A (km <sup>2</sup> )	構成 (%)		
遠野市		154.64	38.7	660.18	23.4
釜石市		72.13	18.1	444.15	16.2
大船渡市		14.20	3.6	186.09	7.6
気仙郡	住田町	157.92	39.6	335.95	47.0
	三陸町	0.29	0.1	136.73	0.2
計		399.22	100.0	1,763.10	22.6

資料：建設省国土地理院調べ

れる面積が狭小であるので、以下の記述でふれない)

## II 地域の特 性

### 1 自然的条件

#### ア 気象条件

本図葉内には気象観測所として遠野観測所があり、図葉外の主なるものとしては世田米、釜石の観測所、大船渡候所が設置されている。(第2表)

本地域は、太平洋岸の表日本気候区に属するものの、北上山系の連峰に囲まれる播鉢状

第2表 観測所の位置

観測所名	所在地	海拔	東経	北緯	水系	関係位置
遠野	遠野市遠野町坂下遠野市役所	m 273	141°32'	39°20'	猿ヶ石川	図葉内北西部
世田米	気仙郡住田町世田米大股	190	141°30'	39°08'	大股川	図葉南縁図廓外
釜石	釜石市甲子町釜石市役所甲子支所	20	141°48'	39°15'	甲子川	図葉東縁図廓外
大船渡	大船渡市大船渡町	37	141°43'	39°04'	盛川	図葉南縁図廓外

資料：岩手県気候誌



第3表 観測所別気象

観測所名 項目	遠 野	世 田 米	釜 石	大 船 渡
平均気温(°C)	9.2	9.9	11.5	11.3
月平均最高気温(°C)	14.3	15.5	16.1	16.2
“最低”(°C)	4.0	4.3	6.8	6.3
年降水量(mm)	1,170	1,331	1,538	1,408
最多風向	W	—	—	SE
初霜月日	10月13日	10月16日	10月31日	10月29日
終霜月日	5月14日	5月9日	4月28日	4月29日
積雪日数(日)	79	—	—	23
初雪月日	11月12日	11月11日	11月24日	11月25日
終雪月日	4月12日	4月7日	4月4日	4月4日

資料：岩手県気候誌

第4表 遠野における月別気候

項目	月別												計 (年平均)	5~10 月月平均	
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
気 温	平均(°C)	-4.1	-3.3	0.9	7.3	12.8	17.3	21.7	23.1	18.4	11.5	5.4	-0.5	9.2	17.5
	最高(°C)	0.5	1.7	5.7	13.2	19.5	22.6	26.2	27.6	23.2	17.1	10.5	3.7	14.3	22.7
	最低(°C)	-9.0	-8.4	-4.0	1.2	6.1	11.9	17.2	18.5	13.4	6.0	0.2	-4.6	4.0	12.2
降水量(mm)	46	48	68	89	94	108	160	141	161	115	77	63	1,170	128	

資料：岩手県気候誌

の地形となつているため、内陸性の盆地的気候を呈する。すなわち年平均気温はおおむね10°C未滿で県内でも低温な地域で気温の格差が大きいが、降水量、積雪量は比較的少ない。

これを遠野観測所についてみると、第3表、第4表のとおりである。すなわち年平均気温は9.2°C、月平均最高気温14.3°C、月平均最低気温4.0°Cで、年降水量は1,170mmであ

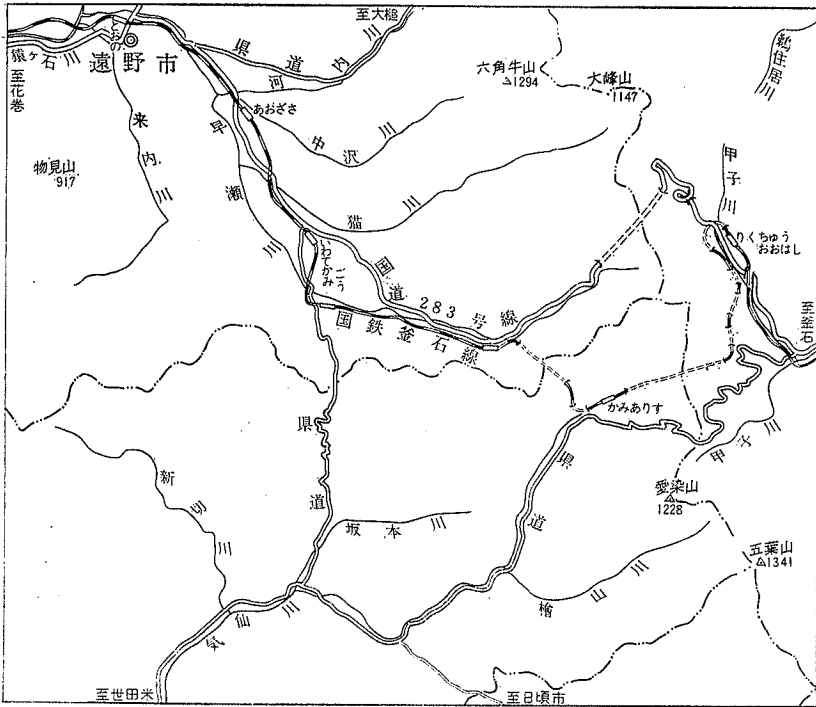
る。

また、初霜が10月13日と早く、終霜が5月14日と一般に遅い。さらに凍霜害発生頻度が高く、農作物への影響も少なくない。初雪は11月12日と県内でも比較的早く終雪は4月12日で、積雪期間79日である。

#### イ 土地条件

「遠野」図葉内の地域は北上山系の南部に位置し、遠野盆地を除いてはきわめて急峻な地形を示している。すなわち、図葉の東部は北上山系の高峰早池峰山の支脈が南北に走り、六角牛山(1,294m)、大峰山(1,147m)、愛染山(1,228m)、五葉山(1,341m)等の山岳が重畳している。また図葉の西部は比較的標高が低く、山岳の頂上付近はなだらかな

第2図 河川図および道路図



丘陵地を形成しているが、東部は標高が高く、頂上付近も急峻である。図葉の北西部は急峻なる連山に取囲まれた北上山系の中でも最も広大な盆地を形成し、図葉内北部を西流する猿ヶ石川とその支流である早瀬川、さらにその支流である来内川、河内川、猫川等の河川流域に広大な耕地が拓けている。また図葉の南部愛染山麓に源を發し、住田町内を南流する気仙川の上流域に細長い耕地を形成している。(第2図)

しかし、総土地面積に占める耕地の割合は5%にすぎず、林野が約90%も占めている。

なお、五葉山の一帯は県立自然公園で、高山植物、鹿の生息地として一大観光地となっている。

## 2 社会経済的条件

### ア 道路

本図葉内の地域は急峻な地形が少なくないため、道路条件にはあまり恵まれず、道路密度(昭和42年3月現在)は1km<sup>2</sup> 当り県道以上では237mと県平均234mをやや上回るが、市町村道以上では894mで県平均の1,307mを大きく下回っている。図葉内を走る主要道路としては内陸部の花巻市(国道4号線)と沿岸部の釜石市を連絡する国道283号線が北上山系の唯一の都市遠野市を經由し、図葉中央部を東西に走っており、これを中心として一般県道、市町村道が地域内を通っている。すなわち主要地方道としては遠野川井線が図葉内北部を走り、一般県道としては、遠野住田線、上有住甲子線、遠野鶴住居線がある。

近年、地域の開発と並行して道路の開発整備も進められてきており、国道283号線の全線舗装が完了したものの、その他の道路は改良整備が遅れている。また、複雑な地形のため曲りくねった道路が多く、主要道路を除いては冬期間は積雪凍結のため交通困難となることが少なくない。

また当地域には国道283号線に並行して国鉄釜石線が走っており、本図葉内には遠野駅など6駅がある。

### イ 人口等の動き

図葉内関係市町村の人口の動きはまちまちであるが、3市を含みながらここ10年間の減少率は10.1%で、最近5カ年では7%も高い減少を示している。

とくに釜石市は最も高く、これは県内最大の企業である釜石製鉄所の整備縮小に加えて農家人口が過去10カ年に約3割の減少をみせたためである。

これに対し、大船渡市は昭和40年～45年間に1.2%の微増ではあるが、ここ10年間に7.9

第5表 関係市町村の人口の動き

市町村名	年次		45年	45/35	45/40	人口密度 (45年)
	35年	40年				
遠野市	36,920	35,433	33,464	△9.4%	△5.6%	50.7人/km <sup>2</sup>
釜石市	87,510	82,104	72,925	△16.7%	△11.2%	164.2
大船渡市	35,946	38,346	38,804	7.9%	1.2%	208.5
住田町	12,619	11,449	10,397	△17.6%	△9.2%	30.9
計	172,995	167,332	155,590	△10.1%	△7.0%	88.2

資料：国勢調査

第6表 農家人口の動き

市町村名	年次		45年	45/35	45/40	農家人口 総人口
	35年	40年				
遠野市	26,038	23,418	20,952	△19.5%	△10.5%	62.6%
釜石市	11,209	9,264	7,884	△29.7%	△14.9%	10.8%
大船渡市	16,641	14,410	11,993	△27.9%	△16.8%	30.9%
住田町	10,131	9,231	7,858	△22.4%	△14.9%	75.6%
計	64,019	56,323	48,687	△23.9%	△13.6%	31.3%

資料：農林業センサス

%の増加を示し、同市の臨海工業団地としての発展のあらわれとみられる。(第5表)

総人口に占める農家人口の割合は、平均31%と低いが、とくに農家人口のウエイトの低い釜石市、大船渡市では地形的制約から飛躍的な農業的発展は望めず、農家人口の流出はきわめて激しい。また相対的にウエイトの高い遠野市、住田町においても同様の傾向をみせつつある。

### 3 土地利用の概況

「遠野」図葉内の地域は北上山系の連山が図葉東部を貫ぬき、これらの高峰に取囲まれた遠野盆地に主に耕地が拓けているにすぎず、耕地率は5.1%で、林野が88.4%も占めている。耕地のうち水田は52.4%も占め、北上山系の中では水田のウエイトが高く、畑地の

占める割合が低い。畑地の利用では遠野市、住田町で工芸作物とくにたばこが盛んで、釜石市、大船渡市では野菜生産が中心となつている。また、樹園地では住田町の養蚕、遠野市の果樹が盛んである。

また、大船渡市を除いて乳用牛、肉用牛などの大家畜畜産の振興がめざましく、飼料畑、牧草畑の増加と同時に草地改良も県内でも最も急ピッチに進められている地域であつて、土地の高度で合理的な利用が図られてきている。

総土地面積に占める林野の割合は88.4%も占め、そのうち森林は87.4%、原野12.6%で人工林率は33.1%にすぎない。その中でも遠野市、住田町は比較的造林の進んでいる地域である。(第7表)

第7表 土地 利用 現 況

区分 市町村名	総土地面積 A ha	耕地 B	田 C	畑	樹園地	林野 D	うち森林 E
遠野市	66,018	5,107	3,117	1,804	185	57,872	46,529
釜石市	44,415	868	362	465	41	40,810	37,990
大船渡市	18,609	1,081	328	657	96	14,903	13,678
住田町	33,595	1,209	526	570	113	30,150	27,409
計	162,637	8,265	4,333	3,496	435	143,735	125,606

区分 市町村名	うち人工 林 F	うち原野	耕地率 B/A	水田率 C/B	林野率 D/A	人工林率 F/E
遠野市	18,112	11,343	7.7%	61.0	87.7	38.9
釜石市	9,068	2,820	2.0	41.7	91.9	23.9
大船渡市	4,320	1,225	5.8	30.3	80.1	31.6
住田町	10,062	2,741	3.6	43.5	89.8	36.7
計	41,562	18,129	5.1	52.4	88.4	33.1

資料：総土地面積は建設省国土地理院調べ、耕地は1970年農林業センサス（概数）、林野面積は農林省「林野面積調査」

### Ⅲ 主要産業の概要

本図葉の関係市町村の産業別就業人口の構成をみると、第一次産業32.7%、第2次産業29.5%、第3次産業37.8%で、第2次、第3次産業の占める比重が高い。(第8表)

第8表 産業別就業人口の構成(40年)

産業別 市町村名	総数	第一次産業				第二次産業				第三次産業
		計	農業	林業 狩猟業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	
遠野市	100.0% (17,406人)	58.3	55.5	2.8	0	13.7	2.6	5.6	5.5	28.0
釜石市	100.0 (32,920)	16.0	7.2	1.0	7.8	39.6	3.7	9.1	26.8	44.4
大船渡市	100.0 (17,407)	28.6	17.6	0.6	10.4	31.0	0.6	13.2	17.2	40.4
住田町	100.0 (5,407)	65.6	61.6	3.9	0.1	13.9	2.0	6.0	5.9	20.5
計	100.0 (73,140)	32.7	25.2	1.6	6.0	29.5	2.6	9.0	17.9	37.8
県平均	100.0	49.0	44.5	1.4	3.1	17.0	1.3	6.9	8.8	34.0

資料：国勢調査

内陸部と沿岸部では大きな差異があり、内陸部の遠野市、住田町は第1次産業が中心であるのに対し、沿岸部の釜石市、大船渡市では、第二次、第三次産業の比重が大きく、第一次産業は最もウエイトが小さい。産業別純生産額でも、同様の傾向をみせている。

(第9表)

産業の中で、農業が中心となっている遠野市では米が農業粗生産額の62.1%も占め、次に次ぐものとしては乳用牛、肉用牛などの畜産、工芸作物とくにたばこなどが主なもので、また住田町では畜産が33.3%で最も高いウエイトを占め、次いで米、工芸作物(とくにたばこ)養蚕となっている。

沿岸部の釜石市、大船渡市では、畜産、野菜が主で、畜産の中でも豚、鶏の中小家畜が主体である。(第10表)

地域内の企業についてみると、内陸部の遠野市、住田町には鉱業、繊維工業等一部中規

第9表 産業別純生産額の構成

市町村名	産業別 総 額	第 一 次 産 業			第 二 次 産 業	第 三 次 産 業
		計	うち農業	うち林業		
遠 野 市	100.0% (8,426百万円)	35.8	23.8	12.0	18.1	46.1
釜 石 市	100.0 (39,446)	17.5	0.8	0.3	54.5	28.0
大船渡市	100.0 (13,448)	12.4	3.1	2.5	44.2	43.4
住 田 町	100.0 (2,299)	30.3	20.0	10.1	27.0	42.7
計	100.0 (63,619)	19.3	5.0	2.7	46.5	34.2
県平均	100.0 (380,816)	23.4	16.1	3.0	26.2	50.4

資料：昭和43年度市町村民所得統計

第10表 農 業 粗 生 産 額

市町村名 作目別	遠 野 市		釜 石 市		大船渡市		住 田 町		関係市 町村平 均構成 比	県平均 構成比
	粗生 産額	構成比	粗生 産額	構成比	粗生 産額	構成比	粗生 産額	構成比		
耕 種 計	百万円 2,637	% 82.9	352	56.8	455	52.5	505	59.2	71.5	78.8
う ち 米	1,974	62.1	185	29.9	175	20.3	260	30.4	47.0	60.5
う ち 野 菜	150	4.7	106	17.1	90	10.4	47	5.5	7.1	5.9
うち工芸作物	321	10.1	0	—	7	0.8	116	13.6	8.0	4.3
養 蚕	7	0.2	6	1.0	10	1.2	64	7.5	1.6	1.0
畜 産 計	538	16.9	262	42.2	401	46.1	284	33.3	26.9	20.2
うち役肉牛	115	3.6	11	4.2	9	1.0	14	1.6	2.7	2.8
う ち 乳 牛	319	10.0	47	7.6	71	8.2	126	14.8	10.2	8.0
合 計	3,182	100.0	620	100.0	866	100.0	853	100.0	100.0	100.0

資料：昭和44年度農業所得統計（農林省）

模な工場があるだけでめだつたものが少ないが、沿岸部の釜石市、大船渡市は、港湾開発が進められ、本県臨海工業地帯としての発展が期待されており、釜石市には従業員5千名

の新日本製鉄釜石製鉄所とその関連産業、大船渡市は船舶製造業、セメント製造、水産食料品等の製造業がある。

#### IV 開発の現状と方向

「遠野」図葉の関係市町村の産業の中心は第二次産業、第三次産業となっており、とくに釜石市、大船渡市は本県臨海工業都市としての発展をとげている。

しかし、地域の耕地率は5.1%にすぎず、林野の占める割合は88.4%となっており、標高が高く地形が急峻なことから低利用、未利用土地の多い未開発地域を形成している。

本図葉内の東部に位置する釜石市、大船渡市は地形がとりわけ急峻なところから、農業の発展には限界があり、畜産も草地資源を必要としない中小家畜が中心であるが、「土淵」図葉に含まれる釜石市の西部、和山地区は肉牛生産牧場が設置されており、今後の発展が期待される。本図葉内の西部に位置する遠野市、住田町は、産業の中心が農業で、遠野市では乳用牛、肉用牛の飼養が盛んで、住田町は乳用牛が主体で、草地開発の進んでいる地域である。図葉の西南部、住田町には肉牛生産公社住田牧場が昭和44年度から建設され、完成時の昭和47年度には総土地面積412ha、草地229.4ha、常時繫養頭数300頭となり、県南地域の肉用牛飼養農家に繁殖用、肥育用素牛が供給される。

昭和44年7月策定の岩手県県勢計画では、新全国総合開発計画にもとづき、大規模開発プロジェクトの一環として北上山系地域の大規模畜産開発および大規模森林資源開発を計

第11表 図葉内農業開発適地

区分 市町府名	図葉内総土 地面積 A	図葉内農業 開発適地 B	B/A	参 考	
				耕 地	うち牧草専 用地
遠 野 市	15,464	3,247	21.0	5,107	394
釜 石 市	7,213	120	1.7	868	66
大 船 渡 市	1,420	—	—	1,081	58
住 田 町	15,792	1,957	12.4	1,209	135
三 陸 町	29	—	—	557	33
計	39,922	5,324	13.3	8,822	686

資料：広域農業総合開発基本調査（昭和44年度調査結果）



画しており、このため農林省および県では昭和44年度から5カ年にわたって畜産、林業を中心とした広域農業総合開発基本調査を実施している。

遠野市は北上山系の南部の開発拠点都市として地位を占めており、同市を含む本図葉内には、昭和44年度に岩手県が実施した農業開発適地調査結果によると、第11表のとおり図葉内総土地面積の13.3%にあたる5,324haの適地が賦存しており、その大半は比較的緩傾斜地の多い遠野市、住田町に集中している。県内49市町村を含む北上山系地域には17万8千haの開発適地があり、これらとともに「遠野」図葉の地域は畜産、林業の一大開発拠点地域としての発展が期待されている。

なお、当地域は県内でも有数の鉄、石灰石等の鉱山があるが、近年、合理化の方向にある。また、図葉内の東南部には県立自然公園五葉山があり、観光的にも注目されている。

# 各 論

## I 地形分類

### 1 地域概況

非変成の古生界，これに侵入する花崗岩類等を切つて形成された比較的起伏の小さな北上山系は，南北250km，東西70km，の紡錘状の地塊であり，当図葉の東端にも見られる早池峰，五葉山構造帯により南北に二分される。

当地域では，古生界が図葉東部および西南部に広く分布し，これを貫く上述の構造帯の超塩基性岩が図葉東端岩倉山一帯に見られる。他の大部分は，遠野・栗橋・五葉山の花崗岩体の分布域となつている。主要な河川は，北上川に流入する猿ヶ石川，太平洋に流入する気仙川甲子川である。これらの諸河川の谷の方向は，NNW～SSE に走る土淵盛構造線（上寒倉—細越—糖前），遠野—高田構造線（両向—蕨峠）に平行する谷と，以上の構造線に直交する WSW～ENE 方向の断層（例えば，箱根峠—大松）に平行する谷の頻度が非常に多い。従つてまた山稜線も，これらの基盤を切る諸構造に調和的である。大起伏山地は，図葉東部の古生層地帯に広く分布し，小中起伏山地は，図葉西方に分布する。水準測量の結果によると，五葉山・栗橋花崗岩体地域および旧遠野町一帯の広い花崗岩体地域は，隆起域となり，間にはさまる六角牛山，大開山地域の古生層地域は，沈降域となつている。

### 2 地形各論

#### (1) 小起伏山地

当図葉中には，高度900～700m，500～600余mの二段の山頂小起伏面があるが，この地域を小起伏山地とした。前者は元木・外山図葉等北上山系に広く残る1100～700m の隆起準平原に対比されるものであり，後者も元木図葉等に広く残る。上述の隆起準平原内の谷に連続する下流部の侵蝕平坦面に対比されるものであろう。この侵蝕平坦面を筆者は，元木図葉，外山図葉説明書において lower peneplain として説明した。前者は，西隣人首図葉の真任山一帯に連続する蕨峠西方の地域および大峰山北方に小規模に見られるが，両地域共に周囲の谷により侵蝕されつつあるため，外山図葉中の外山牧場のような“傾斜のゆるい円頂丘群と，それに囲まれた皿状谷”といった典型的な景観を示さず，谷の部分は多少深くなつており，樋状谷に近い。気仙川最上流部，坂本東方の700m の山頂部も，これにあたるものであるが，小面積のため省略した。

小起伏山地のうち後者（高度500～600m）は、花崗岩地域に分布している。円形～亜円形の多数の小規模な山稜の稜線は定高性を示す。谷底は浅い樋状～皿状であり密度大であり多数の遷急点で小規模に分断されている。

## (2) 中起伏山地

遠野盆地周辺は、起伏量250m 前後の花崗岩質および古生界の山地となつている。花崗岩質の部分は、物見山のような高い山頂は円頂丘であり、全般に、浅いV字谷～樋状谷と亜角～亜円形の稜線よりなる滑らかな山体であるのに比べ、古生界山地は、全般に直線状斜面、V字谷が目立つ。気仙川および橋野川流域の中起伏山地は、起伏量350m 前後の山地であり、男火山、女火山等の700m 前後以上の高度をもつ稜線は円形であるが、それ以下の高度の稜線は角形となる。谷はV字谷である。なお、気仙川は、その最上流部百合沢の先の赤羽根峠で、猿ヶ石川側の谷を争奪している。

## (3) 大起伏山地

図葉東部、甲子川気仙川猿ヶ石川の上流部で分水界にあたる山地は、地質に関係なく大起伏山地となつている。五葉山一帯の花崗岩山地は、全体になめらかな山体を示し、古生界の部分は、全体に、いわゆる壮年期性の形態をとつている。なお、甲子川の支流、枯松沢は箱根峠の南において、気仙川の上流を争奪している。

## (4) 丘陵地

遠野盆地周縁に高度400m 前後の開析された丘陵が見られる。いずれも小規模で周囲より樋状谷が多数入り込み、稜線は平坦部をもたない。

## (5) 台地

猿ヶ石川および気仙川沿岸に見られる。猿ヶ石川の支流、猫川・中沢間および中沢・善応寺間の台地は、解析の進んだ隆起扇状地である。表面にはローム質の表土が見られる。気仙川に沿う台地は河岸段丘である。大畑・十字小松一帯のものは、現谷底平野との間に急崖をもち、典型的な河岸段丘である。

## (6) 低地

当地域の谷底平野は、前述の小起伏山地中の後者、すなわち砂子沢一帯の500m 余の侵蝕平坦面上に見られる浅い樋状～皿状谷とそれ以外の猿ヶ石川沿岸、気仙川沿岸、甲子川沿岸のものに区分出来る。前者は多数の遷急点により小規模に寸断され、現河谷との間には、大きな遷急点があつて切り離され、全体として、谷密度の大きな前輪廻の谷底平野群

となつている。後者の内、猿ヶ石川の谷底平野は北上山系中最も面積の広いものである。北上山系中で谷底平野が広いのは、花崗岩の分布域であるが、当地区は、北上山系中最大の遠野、土洩花崗岩体の分布域である。基盤は浅く、谷底平野下、4～5 mに出現する。一般に、花崗岩の基盤はマサ状となつている。

早瀬川は、平野原、宇南林一帯で、扇状地状の地形を発達させ、周囲の谷底平野との間に若干の比高がある。さらに上流部には、支流が小規模な扇状地を形成しているが、これらのうち、上流側の傾斜のよりきついものを、崖錐状扇状地 Ftとして区別した。実際には、その差異はあまりない。

#### 参考文献

田山利三郎・土田定次郎(1939)：北上山地の地形学的研究，其一，河岸段丘B，北上川および馬淵川の河岸段丘

学術研究報告第22 齋藤報恩会

三野与吉(1942)：地形原論

中村喜男(1960)：阿武隈隆起準平原北部の地形発達，東北地理第12巻第3号

Yoshio Nakamura (1963) : Base Levels of Erosion in the Central part of the Kitakami Mountainland, Science Reports of the Tohoku University, Seventy Series (Geography), No. 12

中村嘉男(1963)：篋岳丘陵における高位侵蝕谷と地形発達，東北地理第15巻第1号

赤木祥彦(1964)：陸前高田の Pediment 一段丘による形成時代決定の一例

地理科学第3号

Yoshio Nakamura (1964) : Relief Distribution in the Northern part of the Kitakami Mountains Science Reports of the Tohoku University, Seventh Series (Geography) No. 3

Shigeki Matsumoto (1964) : Landforms of Accumulated Boulders in the Abukuma and Kitakami Mountainlands.

Science Reports of the Tohoku University. Seventh Series (Geography), No. 12

Yoshio Nakamura (1970) : Morphology, of Senmaya Hill in the Southern Part of the Kitakami Mountains Science Reports of the Tohoku University, Seventh Series (Geography). No. 16

小賀義男（1969）：北上山地地質誌，東北大地質古生物学教室研究邦文報告第69号  
 市川浩一郎・藤田至則・島津光夫（1970）：〔日本列島〕地質構造発達史，築地書館  
 （梯地域開発コンサルタンツ 上杉 陽）

## Ⅱ 表層地質

### 1 表層地質概況

この図葉に属する地域には，古生代石炭紀，二疊紀の粘板岩，輝緑凝灰岩，石灰岩が中南部に分布し，東部には中生代白亜紀の安山岩質岩石が二条の断層にはさまれて地溝状に南北に連らなっている。これに北部から遠野花崗岩体，南西部に五葉山花崗岩体が貫入している。花崗岩体の貫入により，周囲の古生層，中生層は，接触変成をうけている。

古生層，中生層は複雑な断層，褶曲運動をうけているが，全体的に硬質（3・C）である。

第1表 遠野図葉層序区分

時代層序		岩層名	岩層の種類	
新 生 代	第 四 紀	沖積世  扇状地・段丘堆積物 崖錐堆積物	砂 礫	未 固 結
			砂 泥	
	碎屑物			
	洪積世	段丘堆積物	砂 礫	
	新三 第紀		流紋岩	未固結
中 生 代	白 亜 紀	遠野花崗岩 六角牛・土倉峠火山 岩類	{ 花崗閃緑岩 斑 礫 岩  { 安山岩, 同集塊岩 凝灰岩, 粘板岩, 砂岩	固 結
古 生 代	二 疊 紀 — 石 炭 紀	北上南部型 古 生 層	礫 岩 粘 板 岩 輝緑凝灰岩 石 灰 岩	固 結

一方、花崗岩類は、深層風化が進んでおり、マサ化し、表層では、組織をのこしているが、たやすくハンマーでくずれる状態である。とくに早瀬川にのぞむ地域は、開析が進み、その傾向が著しい。

崖錐・砂礫層など未固結堆積物は主に花崗岩地域に分布している。

## 2 表層地質各論

### (1) 未固結堆積物

#### ア 砂礫 $g_1$

早瀬川、坂本川、気仙川に沿って、沖積の砂礫層が分布している。花崗岩地帯を開析している早瀬川兩岸は広く沖積層が堆積している。花崗岩質砂と古生層の礫から成る場合が多く、全体に砂がちで、硬さは(1・a)である。

一方、坂本川、気仙川の谷沿いに分布する砂礫層は、古生層の粘板岩、石灰岩から成り、礫がちで、硬さは(1・b)である。

#### イ 砂泥 s

遠野市街地から、猿ヶ石川付近には泥がちの砂層が堆積している(1・a)。

#### ウ 碎屑物 cl

崖錐は、主として、花崗岩地帯に広く発達しており、古生層地帯では、坂本川付近にわずかに分布している。物見山南部や早瀬川にのぞむ山麓斜面では、花崗岩の転石を含む、赤茶色の砂礫や粘土からなる崖錐が扇状地状の地形をつくっている(1・b)。

#### エ 砂礫 $g_2$

気仙川、坂本川に沿って、洪積段丘が発達し、砂礫層をのせている。また早瀬川、猿ヶ石川流域には、やや開析の進んだ段丘が広がっている。厚さ3m以上の砂礫、粘土、ローム質砂をのせている所もあり古生層の礫が多い。

### (2) 固結堆積物

#### ア 礫岩 Cg

釜石鉾山～上宍住～住田町付近に薄衣型礫岩、西南部火ノ土川付近に、二畳系の基底礫岩が分布している。前者はよく円磨されたチャート、粘板岩礫のほか、花崗岩礫を含むのが特徴であり、後者は、チャート、砂岩の親指大の礫でいずれも硬質(3・C)である。

#### イ 泥岩 ms

粘板岩および頁岩からなり、本地域の古生層では最も分布が広い。硬質であるが、はげ

しい断層、褶曲運動をうけており、細片状に破碎されている所もある。花崗閃緑岩との接触部では、ホルンフェルス化して堅硬になつている。硬さは普通（3・C）で、一部風化している所で（2・b）程度である。

#### ウ 輝緑凝灰岩 Sch

東部および南西部に火山碎屑岩類や熔岩を含む緑紫色の輝緑凝灰岩が分布している。主に安山岩質のもので、集塊岩、砂質凝灰岩や角礫凝灰岩などがある。層内褶曲や圧砕作用をうけている部分が多い。全体に硬く（3・C）に属する。

#### エ 石灰岩 Is

南部一帯に広く分布し、しばしば礫岩状、あるいは角礫岩状を呈している。灰白色、結晶質で、地形にも独特の高まりをみせて、他の古生層とは区別できることが多い。硬さは一般に（3・C）であるが、とくに結晶質の部分は堅硬である。

### (3) 火山性岩石

#### ア 流紋岩質岩石 Ry

釜石鉾山付近に小分布している。貫入時期は、かなり新しいとみられる。

#### イ 安山岩質岩石 Ab

安山岩熔岩および同集塊岩、安山岩質凝灰岩を主体として、一部に凝灰質砂岩、粘板岩の薄層をはさむ。六角牛山～田面木付近と土倉峠～箱根峠付近に、平行した2条の断層にはさまれて地溝状に分布しているものは、化石から白亜系とされている。そのほか片羽山、旧下有住村に小分布する玢岩質岩がある。安山岩～集塊岩は硬く（3・C）一部凝灰岩の部分が（2・b）程度である。

### (4) 深成岩

#### ア 花崗岩質岩石 Gr

遠野花崗閃緑岩体の一部および五葉山花崗閃緑岩体の一部が、それぞれ西部と東南部に分布している。いずれも中粒～粗粒の黒灰色の花崗閃緑岩が主体であり、周囲の古生層の粘板岩、石灰岩に熱変成をあたえて、釜石鉾山をはじめ鉱床胚胎の要因となつている。

ほとんど全域で表層は、マサとなつており、深層風化がすすんでいるとみられる。とくに遠野市街地南東部の早濶川に沿つた花崗岩地域は、10m以上の（1・a）の軟質部が露出している。

#### イ 斑岩質岩石 Gb



東部の岩倉山付近に古生層の構造に沿って分布している。やや変質している（3・C）。

## (5) 変成岩

### ア ホルンフェルス Hr

釜石鉱山付近に分布する。花崗岩の接触変成をうけて、粘板岩が片状点紋ホルンフェルスとなつている。石灰岩は石榴石スカルン等に変質しており、釜石鉱山等の鉱床群を生んでいる。そのほか、程度の差こそあれ接触変成をうけてホルンフェルスを生じ、硬質になつている。

## 3 応用地質

### (1) 鉱床

#### ア 釜石鉱山

鉱山付近の地質は、古生層の石灰岩、粘板岩、輝緑凝灰岩等の堆積岩類とこれらを貫く中生代の花崗岩類からなり、鉱床は、石灰岩、矽岩およびホルンフェルス中に胚胎する不規則塊状の高温交代鉱床である。磁鉄鉱、黄銅鉱のほか、磁硫鉄鉱、黄鉄鉱などの鉱石鉱物からなり、1960年までの生産量は鉄795万t、銅約2.5万tである。

#### イ 大峰鉱山

付近の地質は、古生層の粘板岩、砂岩、礫岩等とこれを貫く花崗岩類からなる。鉱床はホルンフェルス中の接触交代高温熱水性の銅鉱床であり、角礫状スカルン、緑色スカルンおよび石榴石スカルン中に不規則塊状、あるいは、円筒状を呈して網状ないし、鉱染状に胚胎する。黄銅鉱、磁硫鉄鉱、キューバ鉱を主として産する。

1937～1960年に産出金属量は、1400t (Cu) 1961年の産出鉱量は76,866t (Cu=15.3%, Au=1.41 g/t, Ag=14.08 g/t)

### 参考文献

- 1 岩手県(1956) 岩手県地質図および同説明書(Ⅰ)(Ⅱ)10万分の1
- 2 小貫義男(1969) 北上山地地質誌 東北大学理学部地質学古生物学教室研究報告
- 3 広川治・吉田尚(1954) 5万分の1地質図幅「人首」および同説明書 地質調査所
- 4 広川治・吉田尚(1956) 5万分の1地質図幅「大迫」および同説明書 地質調査所
- 5 大和栄治郎(1956) 5万分の1地質図幅「土淵」および同説明書 地質調査所
- 6 吉田尚(1961) 5万分の1地質図幅「釜石」および同説明書 地質調査所

(樺地域開発コンサルタント 宗田哲男)

### III 土 壤

#### 1 山地および丘陵地の土壤

本図葉に出現する土壤は、断面形態から、次のように5土壤群、9土壤統群に大別され、さらに11の土壤統に細別された。

土壤群	土 壤 統 群	土壤統
ポドゾル	{ 乾性ポドゾル化土壤 { 湿性ポドゾル化土壤	2 統
		1 統
褐色森林土	{ 乾性褐色森林土壤 { 褐色森林土壤 { 湿性褐色森林土壤	1 統
		1 統
		1 統
黒ボク土	{ 黒ボク土壤 { 黒ボクグライ土壤	4 統
		1 統
岩屑土	岩屑性土壤	—
岩石地	岩石地	—

ポドゾル土壤群は、高海拔地帯に分布している。乾性ポドゾル化土壤のうち、ポドゾル化の発達の程度の弱い土壤（七兵衛頭統）は、五葉山、六角牛山、片葉山、岩倉山の上部に出現し、強度にポドゾル化のすすんだ土壤（五葉山統）は、五葉山の地形的に乾燥の影響を激しく受けがちな場所に出現している。また、湿性ポドゾル化土壤（愛染山統）は、五葉山山頂付近の湿原の周辺に出現する。

これらのポドゾル土壤が発達する地帯は、低温で風衝地が多く、特異な自然条件下にあるので、人工植栽を行なつても、良い成績を期待することは困難で、樹種更改の対象地とすることは適当でない。

また、地形が急峻で、森林の取扱いを誤ると崩壊を誘発する場所も少なくないので、治山上留意する必要がある。

したがつてこの地帯は、経済林として利用するよりは、むしろ、土地保全、風致保護に主眼をおき、自然休養林的な利用をはかるべきであり、森林の取扱いも、大面積皆伐はさけ、ヒバ、コメツガ、キタゴヨウ等、稚樹の発生が比較的良好な樹種を対象に、天然更新による施業を主として行なうべきである。

褐色森林土壌群は、主に本図葉東部の山岳地帯から、南部一帯にかけて分布している。

乾性褐色森林土壌（大志田統）は、尾根筋や凸形斜面上部など、地形的に乾きやすい場所に分布する水分、養分に乏しい残積土で、一般に土層が浅い。この土壌は、アカマツの造林や、天然性有用広葉樹の保護育成を主体として施業したい。なお、アカマツ造林の上限は、温量指数60°を目安としたい。

褐色森林土壌（米内川統）は、適潤な環境下で、正常な層位が分化発達した土壌であり、分布の幅は広い。緩斜な峰筋や、山麓平坦地に分布する残積土は理学的の不良な場合が多く、斜面上部などに出現するやや乾燥に偏いた土壌は、生産力がやや低い。しかし、山腹下部にあらわれる崩積土はスギの成長が良好なので、この土壌については土壌条件をよくみきわめ、可能な限り適次スギ林に変えていくべきであろう。

湿性褐色森林土壌（白見山統）は、水分に恵まれた凹形斜面、山麓斜面下部などに分布する崩積または押し出し堆積物を母材とする土壌である。一般に土層は深く、腐植も深くまで浸透している。全層に小中角礫を含み、透水、通気ともによい。広葉樹林として放置されているところも多いが、スギ造林地としてもかなり利用されている。草本木本とも成育旺盛であり、スギ人工林造成の最適地であるから、積極的にスギ林を造成するようにしたい。なお、スギ造林地の限界は、一応温量指数65°を目安にしたい。

黒ボク土壌群は、土洩図葉に接続する北部の六角牛および大開山地域から西部の物見山地域にわたって、主として分布している。

林地にはアカマツ、クリ、コナラ、ミズナラを主とした林分がみられるが、草生地もかなり広範囲に分布し、放牧地や採草地として利用されしている。近年、これら草生地に対し、拡大造林が積極的に行なわれてきている。

黒ボク土壌は、尾根筋や斜面凹部等乾燥しやすい環境下に分布し、表層に乾性の構造が認められる土壌（物見山統）と、広い峰や斜面下部等、適潤の環境下に発達した土壌（大尺山統）、集水地形にあらわれ、水湿に富み、腐極にすこぶる富む黒色のA層が深くまで発達した土壌（天ヶ森統）、高海拔地帯に出現した黒ボク土壌のうち、B層上部に弱度の集積が認められる土壌（岩神山統）の4統に区分された。このうち、天ヶ森統および大尺山統の崩積土は生産性が高いので、スギの植栽が適当である。また、大尺山統の残積土や物見山統には、アカマツ、カラマツの造成可能地が多い。岩神山統はブナやダケカンバの疎林や、裸地状を呈するところが多い。高海拔地帯に分布しており、経済林としての施業

は困難であろう。

黒ボクグライ土壌（佐野統）は、台状地形の低凹部や斜面から平坦にうつる変移部に出現する地下水水位が30cm以内のグライ化した黒ボク土である。植栽樹種としてはヤチダモぐらいしか考えられない。

岩屑性土壌および岩石地については特に統の設定は行なわなかつた。いずれも林地としての効果的な利用はできない。

#### 参考文献

- (1) 林野庁・青森営林局：青森営林局土壌調査報告・北上川中流経営計画区
- (2) 林野庁・青森営林局：青森営林局土壌調査報告・岩手南部経営計画区
- (3) 岩手県：民有林適地適木調査説明書（1955～1967）

（岩手県林政課 山口博司）

## 2 台地および低地の土壌

本図葉は北部の花崗岩よりなる500～1,000m程度の比較的起伏の緩かな山地と、それにつらなる山麓緩傾斜地および、南部、東部の古生層に由来する粘板岩、頁岩等よりなる急峻な地形を示す山地と、それらの山麓傾斜地の崩積地よりなり、低地は、北流する早瀬川と南流する気仙川の主要河川により形成された沖積地と、小河川による狭小な谷底平野からなる。これら地域に分布する土壌の概略は次の通りである。

### (1) 河川低地の土壌

山地が花崗岩よりなる北部では、花崗岩を母材とする沖積地をなし、耕地として大部分が水田として利用されている。土壌は黒ボクを混入する粗粒灰色低地土壌統群に分類され、上郷統、豊間根統がこれに属し、小河川による開析地では遠野川原統が、その分布を示す。また権現には粗粒グライ土壌統群の上綾織統が分布し、一部青笹には灰色低地土壌統群の松崎統、遠野市街北東部には本宮統の分布がみられる。図葉南部の住田町においては、地質も古生層となり、山地は急峻で谷底低地部は狭小な耕地で大部分は水田として利用されているが、一部に畑がみられる。土壌は粗粒灰色低地土壌統群に属する沢田太田統、下太田統が大半を占める。

### (2) 台地の土壌

台地は青笹北東部の沢田、飛鳥田、善応寺を中心とする地域と、上郷北部にあたる暮坪伊原、中沢を中心とする地域に分布し、これらの台地には表層から黒ボクを被覆した厚層

黒ボク土壌統群，黒ボク土壌統群，および多湿黒ボク土壌統群が分布している。これらの土壌は何れも表層より黒ボクを被覆しており，多湿黒ボク土壌統群は水田として利用され，他の土壌統群は大部分畑地として利用されている。厚層黒ボク土壌統群には，赤羽根統，黒ボク土壌統群には伊原統が属し，多湿黒ボク土壌統群には滝沢統が属する。何れの土壌も腐植層が厚く，礫は殆んど出現しないが，礫がみられてもその含量は少ない。

### (3) 山麓傾斜地の土壌

山麓傾斜地は一定の地域分布を示すことなく，本図葉中全般に亘つて分布し，その大部分が，崩積地で，それぞれの母材の影響を強く受けている。すなわち，図葉北部の花崗岩地帯では，花崗岩に由来する土壌で，多くは黒ボクを混入する。土壌は黒ボク土壌統群に属する伊原統が広く分布し，晴山北部には村崎野統が分布する。また粗粒黒ボク土壌統群としては，細越東部に光興寺統，栃内統の分布がみられ，栃内統はさらに佐比内，馬ノ木内にも分布する。黒ボクの影響の少ない黄色土壌統群としては栃洞統が遠野市街地南部にその分布がみられる。住田町を中心とした地域においては，粘板岩，頁岩等の母材による影響も大きく，粗粒淡色黒ボク土壌統群の和野統の分布が広く，一方火山灰の影響の強い黒ボク土壌統群には姉帯統が属し，坂本を中心に，その分布がみられ，また厚層黒ボク土壌統群として大川統が奥新切を中心に分布する。なお淡色黒ボク土壌統群として堀内統が北東部にわずかに分布する。地形的には，傾斜の緩急，礫の出現の有無によつては土地利用上，開発の余地が考えられる。

### (4) 山地の土壌（人工草地）

人工草地として利用され，本図葉中央部西寄りの一部に分布し，花崗岩を母材とする土壌で，表層に黒ボクを被覆するが，黒ボク層は一般にうすく，下層は腐植に乏しい褐色の土壌である。土壌統群は黒ボク土壌統群に属する小泉統が分布し，土地利用上は格別障害となるものは考えられない。

(岩手県農業試験場 中野信夫)

## IV 傾 斜 区 分

傾斜区分図は地形傾斜度により，7段階に分け（40°以上，30°～40°未満，20°～30°未満，15°～20°未満，8°～15°未満，3°～8°未満，3°未満），適当な広がりをもつ地域に区分して表示するもので，傾斜度数は地形図において最もよく地形傾斜を表現すると思わ

れる地点をとり、その傾斜角を計測する。この図は各種産業立地の基礎となる道路建設等の素資料となるであろう。

一般に、主要河川沿いの谷底平野は $0^{\circ}\sim 3^{\circ}$ の傾斜を示す。特に猿ヶ石川支流の早瀬川、その他の河川の合流部の低地部に広い面を持つ、図葉西縁の小起伏山地にあつては稜線、谷線共に $8^{\circ}\sim 15^{\circ}$ の傾斜を示す部分が圧倒的に多く、中起伏山地では主要稜線は $8^{\circ}\sim 20^{\circ}$ が多く、支稜線で $20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ 、最大傾斜を示す山腹斜面は $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ となる。図葉東部に広がる大起伏山地は、主要稜線で $8^{\circ}\sim 20^{\circ}$ の傾斜、支稜線で最大 $20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ 前後、山腹斜面は $30^{\circ}\sim 40^{\circ}$ の部分が多いが $40^{\circ}$ を越える部分も諸々に見られる。

丘陵地の傾斜は、小起伏山地とほぼ同じ状態である。

(梶地域開発コンサルタンツ 上杉 陽)

## V 水系谷密度

水系図は、河中1.5m以上の河川の平面形の現状を空中写真を判読して水系を当該写真の上に表示したのちこれを基図に転記し、現地調査の結果に基づいて整理補正して作成した。

谷密度図は水系図を基礎として、土地の開析状態を数量的に表現するように地形図を縦横40等分し、その方眼区画の辺縁を切る谷の数の和を求めそれを20等分区画、すなわち、前述の方眼区画の4区画の和で示した。

本図葉における主要な水系は、北上川に流入する猿ヶ石川、直接太平洋に流出する気仙川、甲子川である。これらの水系は図葉のほぼ中央部を南北に分けた南半部と西半部とでは発達に相違がみられる。すなわち、東半部では伸張期および彫琢期であり、これに対し西半部では彫琢期より満拡張期に移行しつつある状態にある。

これらの諸水系の谷の方向は、NNW～SSWに走る土渕―盛構造線（糖前～細越～上寒倉）―遠野―高田構造線（藤峠～両向）に平行する谷と、それに直交するWSW～ENE方向の断層（例えば、箱根峠～大松）に平行する谷の頻度が非常に多い。これに支配されているため主要水系は格子状の河系模様を呈する。特に図葉の東半部では顕著である。しかし、末端の支沢は樹枝状あるいは羽毛状を示しており、図葉の西半部ではこの河系模様が著しい。また随所に放射状河系がみうけられる。図葉北西部の物見山などがこの例である。

谷密度は、図葉の西半部に高く、東半部に低い。殊に西半部における小起伏侵蝕面を開析する谷数は多い。40/km<sup>2</sup>以上をしめるところもみられる。

(㈱地域開発コンサルタント 上杉 陽)

## VI 起 伏 量

起伏量図は、地形図を縦横各20等分し、それによつて作成される単位区画内における、地形の最高点と最低点との高度差を計測し、その高度差の絶対値の一位の位を四捨五入し、その結果得られた数値の $\frac{1}{10}$ の数値で、起伏量を示した。従つて実際の起伏量は、作成された起伏量図の数値×10には近い値である。

また次の表に示すような区分値をもつて、起伏量区分図を作成した。

区	分	区分値	
起伏量	50m未満	0	
起伏量	50m以上	100m未満	1
起伏量	100m以上	150m未満	2
起伏量	150m以上	200m未満	3
起伏量	200m以上	300m未満	4
起伏量	300m以上	400m未満	5
起伏量	400m以上	500m未満	6
起伏量	500m以上	600m未満	7
起伏量	600m以上	700m未満	8
起伏量	700m以上		9

なお起伏量区分図より、頻度分布図を作成し、図葉全般的な傾向を推測した。

本図葉では、北西部の地域と残りの部分の地域の二つに大別できる。

すなわち、北西部では小起伏量を、他の地域では中起伏量および大起伏量を示す。

特に北西部では、遠野盆地で最も起伏量は小さく、盆地の南西側にも起伏量の小さい丘陵地がある。

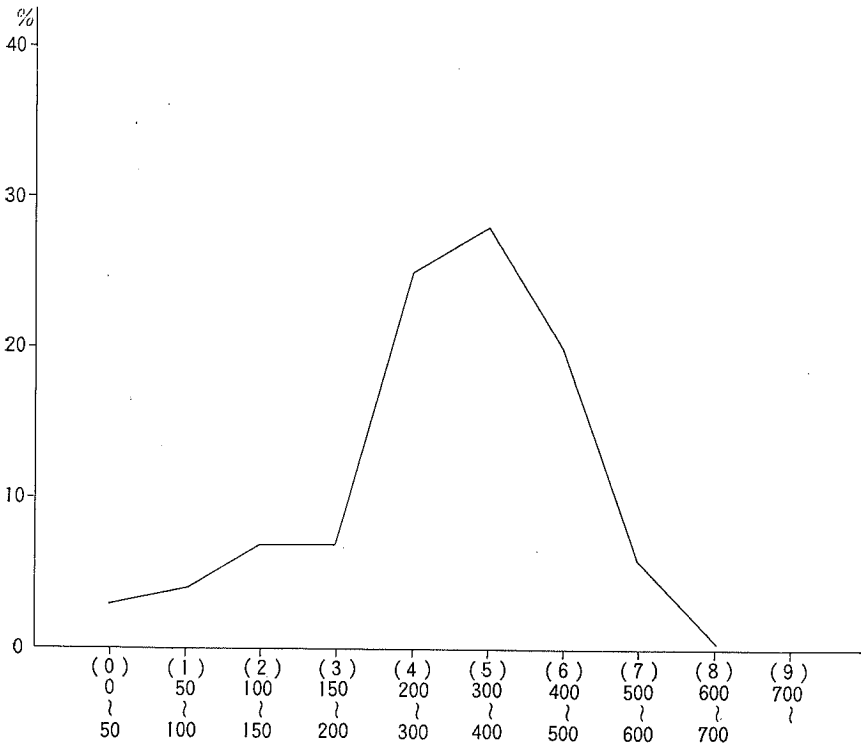
また図葉東部ほど起伏量が大きくなる傾向にあり、甲子川流域では500~600mの大起伏

量を示している。起伏量区分の頻度累加曲線を描いてみると、グラフは150~200m未満の点と400~600m未満の点で大きく折れる。

すなわち、中起伏量を示す地域の、頻度累加増加率と、小起伏地域の頻度累加増加率に明りような差がある。このことは山地と、それに隣接する丘陵地および盆地等の地形区の面積的な差を現わしていると考えられる。

本図葉では、全面積の $\frac{4}{5}$ が、盆地、丘陵であり、 $\frac{1}{5}$ が山地の割合で、起伏量区分図にも明りように現われている。

### 起 伏 量





## VII 標 高 区 分

本図葉の標高区分図の作製にあたっては、標高が0～100m, 101～200m, 201～300m, 301～400m, 401～600m, 601～800m, 801～1000m, 1001～1500m, 1501～2000m, 2001～2500m, 2511～3000m, 3001m以上の12段階に分類し、地形図の等高線を境界線として、地域区分をおこない表示し作製した。なお、緩傾斜面については、特に、上記以外に50m, 150mの標高を示す等高線を使用して区分した。

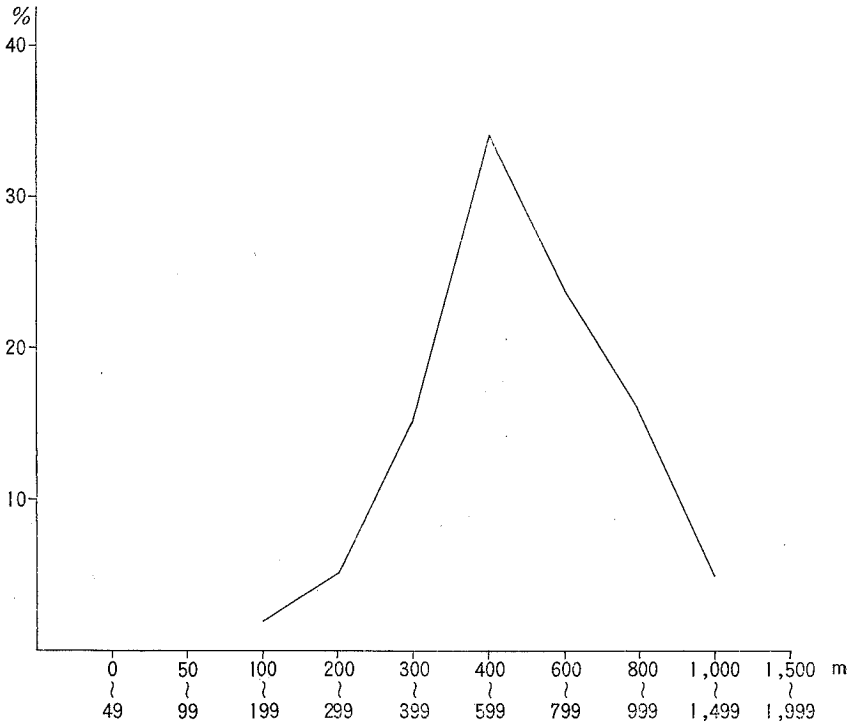
なお、地形図を縦20横各等分し、その結果作られる各交点の標高を求め、その数値を前述の12段階にあてはめ、頻度分布図を作成し、全体的な指針とした。

また、同時に、頻度分布図より、頻度累加曲線を描き、全体的な地形の特性を考察した。

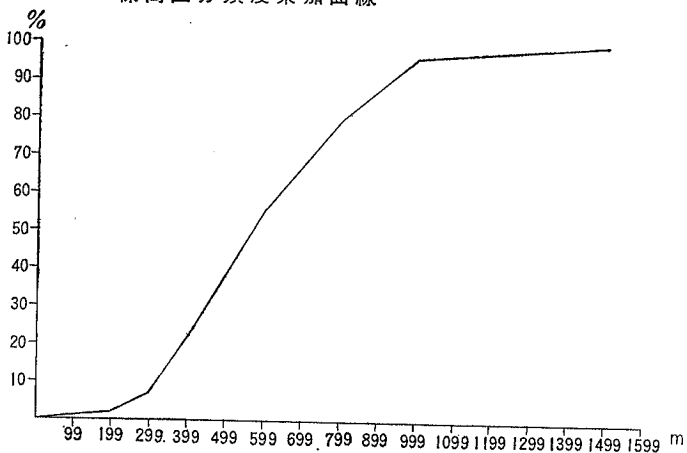
頻度分布図のみをみると、400～600m未満が非常に広い感じを受けるが、実際には高度差のインターバルが200mであり、頻度累加曲線を描いてみると実際は、300～1000m未満までの累加面積増加率はむしろ減少の傾向を示しており、特に1000m以上になると累加面積の増加率は急激に減少する。すなわち、300～1000m未満の地域は全体にわずかではあるが、凹斜面形を示すものと考えられ、1000m以上の地域は、面的に非常に小さな拡がりしかもたない。

本図葉では遠野盆地が最も低く400m以下であり、盆地の南西側には面的な拡がり小さいが、定高性をもつた500～600mの背面をもつ丘陵地がある。これに対して、地形図の東部は、解析の進んだ山地部であり、山頂には面的拡がりをもつような緩斜面は少ない。

標高区分図



標高区分頻度累加曲線



1971年3月 印刷発行  
北上山系開発地域  
土地分類基本調査

## 遠 野

編集発行 岩手県農地林務部北上山系開発調査室  
岩手県盛岡市内丸10番1号  
印刷 内外地図株式会社  
東京都千代田区神田小川町3-22

北上山系開発地域

国土調査課  
保存用

---

# 土地分類基本調査

---

## 遠野

(別冊)

5万分の1

国土調査

岩手県

1971

## ま え が き

この調査は、昭和45年度において、経済企画庁の助成を得て実施した開発地域土地分類基本調査事業〔遠野〕図葉の補完のため、岩手県北上山系開発地域土地分類基本調査（県単事業）作業規程に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図を基図とし、〔利水現況〕〔防災〕〔土壌生産力区分〕〔開発規制〕および〔土地利用現況〕について県単独事業として実施したもので、株式会社地域開発コンサルタンツに委託し、成果をとりまとめたものである。

本冊の利用にあたっては、〔北上山系開発地域土地分類基本調査〔遠野〕〕図葉（1971年3月発行）と相互に有機的に組合せ、土地資源の開発、保全並びにその利用の合理化、高度化のため広く活用されることを望むものである。

昭和47年3月

岩手県北上山系開発調査室

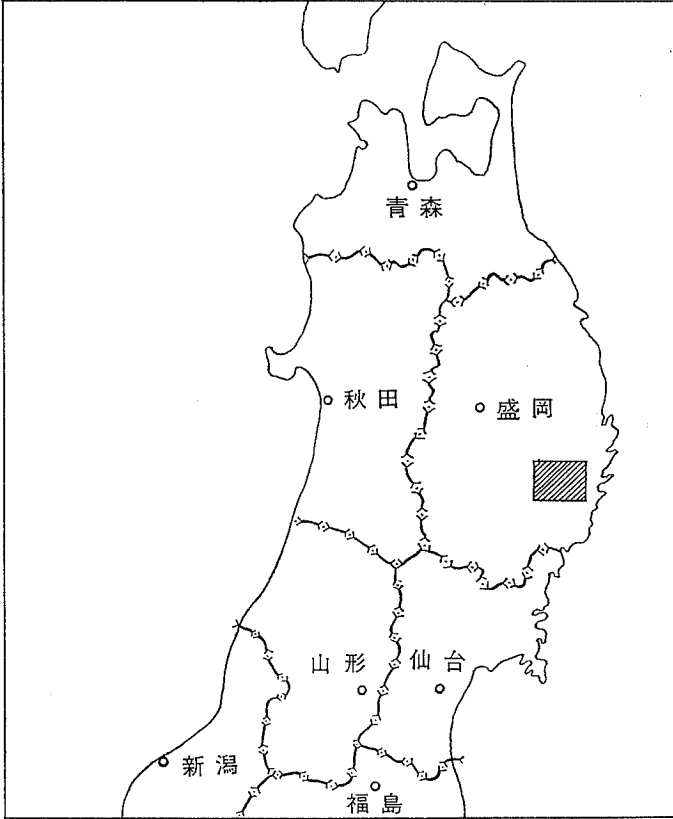
# 目 次

まえがき

## 各 論

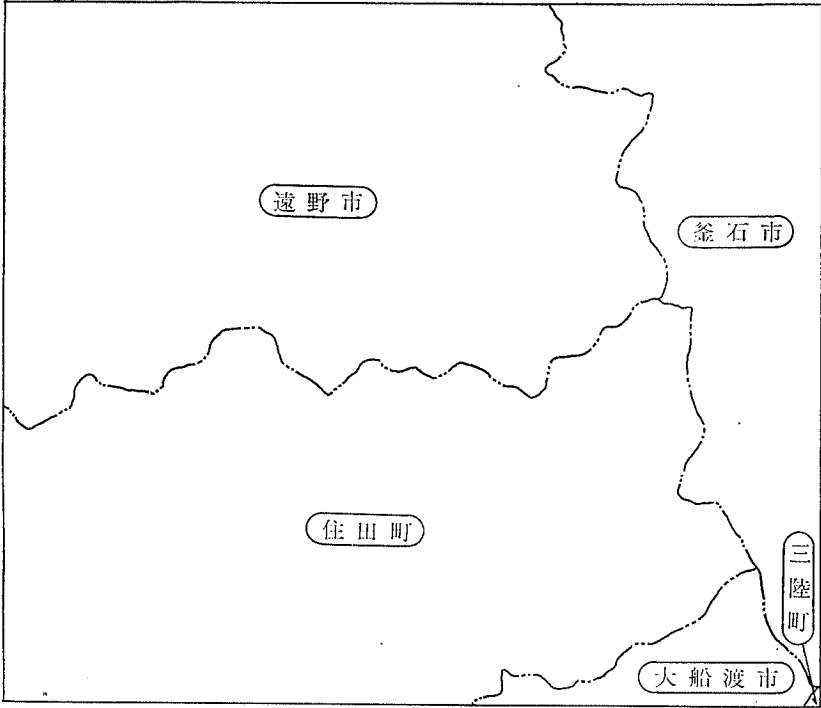
I	利水現況	1
1	河川の概況	1
2	利水状況	1
II	防 災	3
1	水 害	3
2	砂防、地すべりおよび崩壊	6
III	土壤生産力区分	7
IV	開発規制	11
1	保安林	12
2	鳥獣保護区	12
3	史跡、天然記念物および埋蔵文化財	12
4	国有林	13
V	土地利用現況	13
1	農用地	14
2	林地	14
3	原野	14

# 位置図





〔遠野〕 図葉行政区界図



(建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図)

# 各 論

# I 利水現況

## 1 河川の概況

本図葉内における主な河川は、一級河川の北上川水系の猿ヶ石川（指定延長73.1km）の一部と、その支流である早瀬川（同17.1km）、猫川（同10.5km）、河内川（同6.0km）、中沢川（同4.4km）、および来内川（同5.8km）、また直接太平洋に流出する気仙川（同40.0km）水系の本川と、その支流である新切川（同5.1km）、坂本川（同6.6km）、さらに甲子川（同20.7km）の上流部などである。

（猿ヶ石川水系）これらの河川の集合する谷底平野および台地状地形は北上山系中最も面積の広いものである。北上山系中で谷底平野の広いのは、花崗岩の分布域であるが、当地域は遠野、土洳花崗岩体の分布域である。（表層地質図参照）また、これらの河川は扇状地状の地形を発達させ、周囲の谷底平野との間には幾らかの比高がある。

（気仙川水系）本図葉では気仙川の上流部と、その支川である新切川と坂本川が含まれ谷底平野の発達は無弱である。ただし、河岸段丘の発達は比較的良好、とくに大畑、十文字、小松一帯のものは、現谷底平野との間に急崖をもち、典型的な河岸段丘である。

（甲子川水系）本図葉では上流部が含まれ、谷底平野の発達はなく河谷V字谷を呈し、傾斜は急である。

## 2 利水状況

（農業用水）本図葉内における耕地は図葉総面積の約11.5%と少なく、これの大半が前述の遠野盆地の平坦部に存在する。とくにかんがい対象となる水田は、主に各河川に沿う谷底平野に存在する。（土地利用現況図参照）

次表に図葉内の土地改良区、および主要な農業用水施設をしめす。

第1表 図葉内土地改良区（昭和46年1月1日現在）

土地改良区名		受益面積 (単位ha)	用水、排 水の別
穴	堰	44	兼
中	妻	12	"
中	沢	32	"
瀬	内	52	"
上	郷	113	"
平	野原	56	"
東	野細	26	"
十	文	25	"
八	日	29	"
両	向	25	"
西	風	27	"
八	幡前	61	"

第2表 図葉内農業用水施設状況

No.	河川名	堰及び用水名	取水法	取水期間 月～月	受益面積 (単位ha)	取水量	
						最大 $m^3/S$	常時 $m^3/S$
1	猿ヶ石川	角鼻	揚水機	4～9	220.0	1.250	0.902
2	早瀬川	新張	自然	"	20.0	0.255	0.175
3	"	打越	頭首工	"	20.0	0.262	0.186
4	"	中下	"	"	40.0	0.414	0.311
5	"	晴山	"	"	30.0	0.379	0.208
6	"	中妻	集水渠	"	20.0	0.180	0.080
7	"	太田	自然	"	20.0	0.249	0.138
8	"	大寺	集水渠	"	20.0	0.144	0.080
9	"	平野原	"	"	20.0	0.180	0.080
10	気仙川	寒倉用水	自然	5～9	25.0	0.348	0.087
11	"	八日町堰	頭首工	"	23.0	0.322	0.092
12	"	根岸堰	"	"	23.0	0.297	0.078
13	"	和野堰	"	"	30.0	0.395	0.073

(生活用水) 本図葉内に含まれる行政管内は遠野市，釜石市，大船渡市，気仙郡住田町と同じく三陸町の小部分である。このうち上水道の敷設は遠野市のみである。その他，遠野市，住田町に簡易水道，また釜石市には日鉄工業KKの専用水道が敷設されている。次表に本図葉内における水道の敷設概況をしめす。

第3表 図葉内水道普及状況

市町村名	地 区	区域内人口 (人)	給水人口 (人)	計画給水量 ( $m^3/d$ )	普及率 (%)	水道の種類
遠野市	遠 野	13,143	8,984		68	上水道
"	飯 豊	800	515	120	64	簡易水道
"	暮 坪	300	130	39	43	"
"	上 郷	4,457	2,130	675	48	"
住田町	上 有 住	949	461	230	49	"
"	八 日 町	210	100	30	48	"
釜石市	日鉄(大松，荒川)		2,005			専用水道
	(板 堀 沢)		2,406			"

## Ⅱ 防 災

自然災害を考える場合，第一に問題とすべきは災害を起こす原因となる自然現象の起こり方，すなわちその発生の時期・場所・強さ・頻度などであるが，災害は対象物があればこそ起こるのであって，極端ない方をすれば対象物がなければ災害とはならない。すなわち災害は，自然現象の起こり方と対象となる社会環境の両者を合せて考慮しなければならない。

ここでは各災害についての防災事業およびその計画の状況を記載する。

### 1 水 害

本図葉内における主要河川は，猿ヶ石川の一部と，その支流である早瀬川，猫川，河内川，中沢川および来内川と，気仙川，新切川，坂本川さらに，甲子川の上流部である。本

図に集中豪雨時における場合の冠水予測地域を示したが、現在の耕地などが存在する谷底平野のほとんどが含まれる。特に山地部の小河川での増水は相当なものと考えられる。また猿ヶ石川流域は昭和22年、23年のカスリン、アイオン両台風では相当の被害を受けた地域でもある。計画洪水に対しての築堤は遠野市街地の早瀬川下流部にみられ、その他既存の堤防が猿ヶ石川本川および早瀬川に断続してみられる。なお、図葉北西部を北上する来内川の栃洞付近に洪水調節用の来内ダムが建設されている。(提高, 24.8m コンクリート重力式) 次表に重要水防区域および河川改修事業など水害防止資料を示す。

第4表 重要水防区域

河川名	岸別	重要度	延長	重要水防箇所			所轄 土木 事務所
				郡市	町村名	字名	
来内川	左	B	1,300	遠野	大工	大工から本館まで	遠野
"	"	C	1,300	"	"	"	"
猫川	右	B	1,900	"	上郷	羽場から字南田まで	"
"	"	C	1,900	"	佐比内	"	"
中沢川	左	C	430	"	"	鶴巻田	"
"	右	A	430	"	"	"	"
"	"	C	430	"	青笹	"	"
"	"	B	100	"	"	"	"
"	"	C	100	"	"	"	"
"	"	A	60	"	"	"	"
"	"	B	400	"	"	"	"
"	"	C	400	"	"	"	"
"	"	C	3,000	"	"	鶴巻田から瀬内まで	"
河内川	左	C	200	"	"	関田	"
"	"	B	200	"	"	"	"
"	"	C	200	"	"	"	"
"	右	C	2,300	"	青笹	下関から比尻田まで	"
"	"	B	2,300	"	"	"	"

(つづく)

(つづき)

河川名	岸別	重要度	延長	重要水防箇所			所轄 土木 事務所
				郡市	町村名	字名	
早瀬川	右	C	2,300	遠野	遠野	下関から比尻田まで	遠野
"	"	C	1,470	"	"	下早瀬から上早瀬	"
"	"	C	220	"	"	"	"
"	"	A	220	"	"	"	"
"	"	C	220	"	"	"	"
"	"	A	470	"	"	"	"
"	"	C	470	"	"	"	"
"	"	B	700	"	"	"	"
"	"	C	700	"	"	"	"
"	左	C	2,880	"	"	"	"
"	右	B	1,500	"	青笹		"
"	"	C	1,500	"	青笹		"
"	"	B	400	"	上郷	平倉	"
"	"	C	400	"	"	"	"
"	"	B	1,100	"	"	"	"
"	"	C	1,100	"	"	"	"
"	左	B	740	"	青笹		"
"	"	C	740	"	"		"
"	"	B	1,000	"	上郷	平倉	"
"	"	C	1,000	"	"	"	"
"	"	B	100	"	"	桑畑	"
"	"	C	100	"	"	"	"
"	右	C	900	"	附馬牛	小倉	"
"	左	C	500	"	糠前	比尻田	"
"	"	B	500	"	"	"	"
"	"	C	500	"	"	"	"

第5表 中小河川改修事業

河川名	事業概要	施行箇所	施行年度	防 災 上 の 効 果
早瀬川	築堤 5,445 <sup>m</sup>	遠野市	40～	耕地 93.0 <sup>ha</sup> その他 30.0 <sup>ha</sup> 家屋 366 <sup>戸</sup>

第6表 河川局部改良事業

河川名	事業概要	施行箇所	施行年度	防 災 上 の 効 果
中沢川	築堤 458 <sup>m</sup>	遠野市	43～	耕地 45 <sup>ha</sup> 家屋 22 <sup>戸</sup>

## 2 砂防、地すべりおよび崩壊

この図葉に属する地域には、古生代石炭紀、二疊紀の粘板岩、輝緑凝灰岩、石灰岩が中南部に分布し、東部には中生代白亜紀の安山岩質岩石が二条の断層にはさまれて地溝状に南北に連らなっている。これに北部から遠野花崗岩体、南西部に五葉山花崗岩体が貫入している。これにより周囲の古生層、中生層は接触変成をうけている。また、古生層・中生層は複雑な断層、褶曲運動をうけている。一方花崗岩類は、深層風化が進んでおり、マサ化している。とくに早瀬川にのぞむ地域は、開析が進んでおり、砂防指定区域になっている。次表に砂防・山地災害に関する資料を示す。



第7表 通常砂防事業調

河川名	事業概要 (km)	施行箇所		着工年度	完工年度	防災上の効果 (ha)
		郡市	町村			
猿ヶ石川 早瀬川	堰堤工 6 流路工 0.9	遠野	上郷	44	55	田瀬ダム埋没防止 及土砂害及 100
来内川	堰堤工 1	"	"	43	45	氾濫防止面積 40
気仙川	" 8	気仙	住田	43	60	土砂害及氾濫防止 面積 200
" 檜山川	" 2	"	"	40	47	" 10
" 坂本川	" 4	"	"	37	54	" 80
" 火土川	" 7	"	"	43	49	" 40
甲子川 仙人沢	" 1	釜石	甲子	38	41	" 10
" 枯松沢	" 3	"	"	44	47	" 20
" 五葉川	" 3	"	"	40	49	" 50

第8表 山地災害危険地区計画

町村名	危険地区計画											
	緊急度 A				緊急度 B				緊急度 C		合計	
	箇所	面積 ha	保全対象 人家数戸	箇所	面積 ha	保全対象 人家数戸	箇所	面積 ha	保全対象 人家数戸	箇所	面積 ha	保全対象 人家数戸
遠野市	2	民 80	人家 22	1	民 60	人家 20	5	民 370	人家 34	8	民 510	人家 76
	小計	80		小計	60		小計	370		小計	510	

その他に、日鉄鉱業、釜石鉱山などの鉱山域の崩壊も防止対象となる。

### Ⅲ 土壌生産力区分

この調査は経済企画庁国土調査課で作成した「開発地域土地分類基本調査作業規程」に準じて作成された「昭和46年度岩手県北上山系開発地域土地分類基本調査（県単事業）作

業規程]により実施した。

すなわち、昭和45年度に作成された本地域の土壤図にもとづき、生産力に関連する土壤条件（傾斜，侵食等の土地条件は除く）について、各土壤統の土壤生産力を次表によりP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5段階に区分し、これらを統合整理して作成した。

第9表 土壤生産力区分の基準

土壤生産力の区分			P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>
農地	水田	土壤生産力可能性等級	I	II	III	IV	(IV)
	普通畑	〃	I	II	III	IV	(IV)
	樹園地	〃	I	I～II	II～III	IV	IV
草地	草地土壤生産力可能性等級	I	I～II	II	II～III	II～IV	
林地	地位級	I	II	III	IV	IV	

この表の農地の土壤生産力可能性等級，草地土壤生産力可能性等級および林地の地位級は，農林省農林水産技術会議（1964）で定めた分級のうち，傾斜，侵食等の土地条件を除いた土壤生産力的要因にもとづく区分を示す。

林地の地位級は，気候区ごと（本地域は表東北），主要樹種（からまつ，すぎ，ひのき，あかまつ等）ごとにI～Vの階級区分を行ない，これを統合して，樹種にとらわれず，林木生育の可能性により，土壤統ごとにI～V階級に区分した。

区分P<sub>5</sub>に該当する水田および普通畑の土壤生産力可能性等級の（IV）は，農林省地方保全調査事業の土壤生産力可能性分級において，当該分級基準項目の中2以上の基準項目がIVになる場合のものとする。

以上のようにして，本地域に分布する土壤統を生産力区分した。この区分は土壤調査を担当した岩手県農業試験場，同林業試験場の担当者の協議によりきめられた。

第10表 土壤生産力区分

地帯区分	統群	統	生産力区分
A 山地および丘陵地の土壤	岩石地		P <sub>5</sub>
	岩屑性土壤		P <sub>4</sub>
	黒ボク土壤	物見山統	P <sub>3</sub>
		大尺山統	P <sub>2</sub>
		天ヶ森統	P <sub>1</sub>
		岩神山統	P <sub>4</sub>
	黒ボクグライ土壤	佐野統	P <sub>2</sub>
	乾性褐色森林土壤	大志田統	P <sub>3</sub>
	褐色森林土壤	米内川統	P <sub>2</sub>
	湿性褐色森林土壤	白見山統	P <sub>1</sub>
	乾性ポドソル化土壤	五葉山統	P <sub>4</sub>
		七兵衛頭統	P <sub>4</sub>
	湿性ポドソル化土壤	愛染山統	P <sub>5</sub>
	B 台地および低地の土壤	厚層黒ボク土壤	赤羽根統
		石羽根統	P <sub>2</sub>
		大川統	P <sub>2</sub>
黒ボク土壤		小見統	P <sub>2</sub>
		村崎野統	P <sub>2</sub>
		板沢統	P <sub>2</sub>
		姉帯統	P <sub>2</sub>
		堰袋統	P <sub>2</sub>
		山谷統	P <sub>2</sub>
		光興寺統	P <sub>2</sub>

(つづく)

(つづき)

地帯区分	統群	統	生産力区分
		栃内統	P <sub>4</sub>
	粗粒黒ボク土壤	世田米統	P <sub>4</sub>
	多湿黒ボク土壤	滝沢統	P <sub>2</sub>
		沼宮内統	P <sub>2</sub>
	淡色黒ボク土壤	小鳥谷統	P <sub>2</sub>
		鶴巻田統	P <sub>1</sub>
		堀内統	P <sub>2</sub>
	粗粒淡色黒ボク土壤	和野統	P <sub>4</sub>
	黄色土壤	栃洞統	P <sub>2</sub>
		根岸統	P <sub>3</sub>
	褐色低地土壤	上野原統	P <sub>2</sub>
	粗粒褐色低地土壤	梁川統	P <sub>3</sub>
	灰色低地土壤	本宮統	P <sub>1</sub>
		松崎統	P <sub>1</sub>
	粗粒灰色低地土壤	下太田統	P <sub>4</sub>
		沢内太田統	P <sub>4</sub>
		豊間根統	P <sub>4</sub>
		上郷統	P <sub>4</sub>
		遠野川原統	P <sub>4</sub>
	粗粒グライ土壤	上綾織統	P <sub>3</sub>
	低位泥炭土壤	湯田統	P <sub>3</sub>
	その他	湿田	P <sub>5</sub>

このようにして作成した土壤生産力区分図を概観すると、山地森林では、五葉山、六角牛山、片葉山、岩倉山の上部に分布し、強度にポドソル化のすすんだ乾性ポドソル化土壤五葉山統、七兵エ頭統、五葉山山頂付近の湿原の周辺に出現する湿性ポドソル化土壤愛染山統は、樹種更改の対象地にならない。高位地に分布し、集積層が認められる黒ボク土壤岩神山統も、ブナ、ダケカンバの疎林や裸地が多く、施業は困難である。他の森林土壤は造林地に適しており、黒ボク土壤でA層で発達した天ヶ森統、湿性褐色森林土壤の白見山統はとくに生産力が高く、スギの造林や草地造成に適している。

山麓傾斜地および台地土壤は大半が黒ボク系統の土壤からなっているが、このうち、細越東部、佐比内、馬ノ木内に分布する花崗岩質黒ボク土壤栃内統、住田町付近の粘板岩、頁岩の影響の強い粗粒淡色黒ボク土壤和野統、十文字付近に分布する粗粒黒ボク土壤世田米統は、いずれも砂礫質で生産力は低い。他の黒ボク土壤および黄色土壤は、畑地および草地として生産力が高い。

河川低地の土壤では、花崗岩質母材からなる粗粒灰色低地土壤統群は、大半水田に利用されているが、漏水度が大きく生産性は低い。

また権現付近に分布する粗粒グライ土壤上綾織統および平倉付近の低位泥炭土壤湯田統も、排水不良のため生産力はあまり高くない。青笹付近の松崎統、遠野市街北東部の本宮統は、いずれも灰色低位土壤で、分布は狭いが水田としての生産力は高い。

土壤生産力区分図の凡例としては、 $P_1 \sim P_5$ をI～Vと表現した。

#### IV 開 発 則 制

近年、各種の国土開発が急速に進んでおり、このため自然も大きな影響を受け、学術上貴重な生物群集、あるいは遺跡等文化財が急激に姿を消しはじめた地域もみられる。当地域は、わが国でもまれにみる自然が保たれている地域であるが、新全国総合開発計画および岩手県県勢発展計画などにも代表的な大規模開発プロジェクトとして、大規模畜産の開発および大規模林業の開発があげられている。

このような事情から、自然がどのような形で分布しているか、あるいは史跡などの文化財の分布状況はどのようなか等を早急に調査し、自然環境および今日の文化の背景となっている山緒ある遺産を保護することが急務と考えられる。

本図葉内における開発を制限する人為的要因は、次のとおりである。

## 1 保安林

a) 水源かん養保安林：本図葉は、猿ヶ石川（一級河川）の支川である早瀬川などの源流部、および二級河川である気仙川、甲子川の源流部に位置している。主に保安林の指定は、このうちの猿ヶ石川流域の分水界に沿って連なる。その他甲子川流域にもいくつか指定されているが、気仙川流域には少なく、その支川の新切川源流部にみられるのみである。

b) 土砂崩壊防備保安林：甲子川源流部地域の日鉄釜石鉱山域に指定保安林が存在する。その他図葉北西端の猿ヶ石川沿いに小規模なものが指定されている。なおこの地域の地質は花崗岩がマサ化している地域である。

c) 防風防備保安林：遠野市市街地付近と、図葉中央西側よりの羽越山付近にそれぞれ小規模に指定されている。

d) 風致保守林：遠野市郊外の愛宕神社の森が指定されている。

## 2 鳥獣保護区

a) 鳥獣保護区：図葉北西縁に遠野市八幡山（期限、昭和49年10月31日）と、図葉ほぼ中央部の早瀬川沿いの上郷中山（期限、昭和53年10月31日）および図葉南東部の五葉山（期限、昭和55年10月31日）が指定地になっている。特に五葉山保護区は国の指定を受けており、シカ、サル山地鳥類の生息地でもある。

b) 休猟区：遠野市八幡山保護区に接する遠野市土潤休猟区（期限、昭和48年10月31日）と図葉のほぼ中央から南にかけての規模の大きな住田町上有住（期限、昭和47年10月31日）の2ヶ所が現在指定されている。

c) 銃猟禁止区域：前述した遠野市上郷中山保護区の北に隣接する遠野市上郷区域（期限、昭和49年10月30日）が唯一のものである。

## 3 史跡、天然記念物および埋蔵文化財

当地域には天然記念物の指定はみられないが、学術上価値の高い生物群及び生息地が五葉山を中心とする地域にみられる。すなわち、五葉山檜山口のイヌブナ林、シカ生息地、サル生息地、ホンガラスなど五葉山の山地鳥類生息地などである。

埋蔵文化財は本図の凡例に示してあるが、大部分は猿ヶ石川流域の河川沿い及び気仙川

流域の河川沿いに分布する。ただ新田川遺跡のように（図中番号43, 44, 45）比較的山地部に位置するものもある。

#### 4 国 有 林

図葉東側の北部から南部一帯にかけて広範囲にあり、各河川の水源かん養保安林の役目も果している。その他図葉西部にもみられる。なお国有林は針葉樹を中心とする植林地が多い。

### V 土地利用現況

土地利用に影響を与える諸条件としては、その地域の所属する社会の社会経済的条件によることはいうまでもないが、自然条件の様々な制約を受けて土地利用の形態も異なる。

土地自然の条件としては、地理的位置、気候、地形、土壌、陸水（河川、湖沼、地下水など）、地質、動物、植物などがあげられる。これらのうち最も多くの場合に共通する重要な制約因子は気候、地形、土壌の三条件であるが、本説明書では地形の関係を中心に土地利用現況の概格を述べる。

本図葉の地形の概要は、図葉東半における大起伏山地、中西部の小起伏山地、その間の中起伏山地及び遠野盆地などで占められる。なお大起伏山地は猿ヶ石川の諸支流と甲子川および気仙川の上流部で分水界にあたる地域であり、地形は壮年期の形態をとっている。これに対して小起伏山地は、北上山系に広く残る隆起準平原の一部である。遠野盆地にみられる地形は、猿ヶ石川流域の谷底平野と、開析の進んだ扇状地が主なものである。なお気仙川沿には、現谷底平野との間に急崖をもつ典型的な河岸段丘が発達する。

次表に本図葉内の各市町村における土地利用面積比を示す。

第11表 図葉内土地利用面積比（昭和46年現在）

市 町 村 名	総面積	農用地計	耕 地	人工草地	林 地	原 野
	%	%	%	%	%	%
遠 野 市	38.8	9.3	9.0	0.3	27.0	2.5
住 田 町	39.9	2.5	2.3	0.2	34.5	2.9
釜 石 市	17.9	0.2	0.2	0	17.2	0.5
大 船 渡 市	3.4	—	—	—	3.3	0.1
三 陸 町	0	—	—	—	0	0
総 計	100	12.0	11.5	0.5	82.0	6.0

### 1 農用地（耕地，人工草地）

本地域における農用地は図葉総面積の約12%を占め、耕地は11.5%、草地は0.5%である。耕地のうち水田は遠野盆地の谷底平野部と開析扇状地の一部および気仙川流域の谷底平野、河岸段丘上に分布する。また畑地は遠野盆地の開析扇状地とそれに連続する山麓地、および気仙川流域の河岸段丘とそれに沿う山麓地に分布する。なお人工草地は、本地域では規模は小さい。とくに家畜飼料作物と牧草との輪作畑の形態をとるものも一部があるので一時点のみの分類では区別が困難である。果樹園は遠野山地の開析扇状地などにみられ、リンゴ園が主である。桑畑は気仙川に発達する河岸段丘に若干存在する。

### 2 林 地

図葉内における面積比は約82%を占める。樹種はほぼ標高と一致する。すなわち、図葉北東部の大峰山（1147m）、六角牛山（1294m）付近ではシラカンバ、ダケカンバから標高が下るにしたがってブナ、ミズナラなどの林地になり、図葉南東部の五葉山（1241m）地域では、高山植物群落から、ヒノキ、アスナロ、ブナ、ミズナラなどの林地になる。比較的標高の低い地域はコナラ、クリなどの卓越する地域である。なお針葉樹林の大半は造林地域に分布し、樹種は、カラマツ、スギなどが主なものである。

### 3 原 野

本図では、未利用原野及び利用されている天然の草地を原野として示した。

当地域の原野は面積比は約6%であり、図葉中央部および西部に卓越する隆起準平準地



域の一部と図葉北縁にみられる同じく隆起準平原の遺物地域に分布する。ともにシバ型の放牧地となっている。

1972年3月 印刷発行

北上山系開発地域

土地分類基本調査

## 遠 野（別冊）

編集発行 岩手県農地林務部北上山系開発調査室

岩手県盛岡市内丸10番1号

印刷 内外地図株式会社

東京都千代田区神田小川町3-22